

項を2つとる名詞コピュラ文の形式意味論的分析*

郡司 隆男

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gunji[at]shoin.ac.jp

A Formal-Semantic Analysis of Japanese Noun-Copula Sentences with Two Arguments

GUNJI Takao

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿は、意味的に2つの個体の間の関係をあらわす「学生」「学長」のような名詞にコピュラの「だ」がついた形の文の形式意味論的分析を与えることを目的とする。特に、「カキ料理は広島が本場だ」のような、いわゆる「カキ料理構文」の分析に拡張するにあたって、「学生」と「学長」の意味的な性質の違いに触れ、西垣内 (2015a, 2015b) で提案されている「過不足なく指定」するという概念が有効であることを示す。

In this article, I will aim to give a formal-semantic analysis of a kind of sentence with a noun, such as *gakusei* 'student' and *gakucho* 'president', that expresses a relationship between two individuals, followed by the copula *da*. In particular, in expanding the analysis to deal with the so-called "oyster sentences", such as *Kaki ryori-wa Hiroshima-ga honba-da* 'As for oyster dishes, Hiroshima is the best place', I will mention the semantic difference between *gakusei* 'student' and *gakucho* 'president'. Moreover, I will point out the effectiveness of the concept of *exhaustive specification* as proposed by Nishigauchi (2015a, 2015b).

キーワード: カキ料理構文、措定文、指定文、関係名詞、一般化量子子

Key Words: oyster sentence, predicational sentence, specificational sentence, relational noun, generalized quantifier

*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 (C) 『『視点』とモダリティの言語現象—『意識』、エンパシー、阻止効果—』(平成26年度～平成29年度、研究代表者: 西垣内 泰介、課題番号: 26370468)) による援助を受けている。

1. はじめに

「A が/は B だ」という形をもつ日本語のコピュラ文について、郡司 (2015) では、B の部分が単純名詞であり、意味論的には、1 項述語を含む存在量化の一般化量化詞として分析されるものを扱った。

以下にその基本的な主張をまとめる。¹

(1) 基本的な語彙項目の意味論

- 【奈緒美】 $\Leftrightarrow \lambda P [P(n)]$
- 【だ】 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda x \mathcal{P}(\lambda y [x = y])$
- 【学生】 $\Leftrightarrow \lambda P \exists z [\text{学生}'(z) \wedge P(z)]$
- 主題の「は」
 $P: \lambda \mathcal{P} \lambda P \mathcal{P}(\lambda x R(x, P(x)))$
 $A: \lambda \mathcal{P} \lambda P \mathcal{P}(P)$
- 対比の「は」
 $P: \lambda \mathcal{P} \lambda P \exists x [\mathcal{P}(\lambda y [y \neq x]) \wedge \neg P(x)]$
 $A: \lambda \mathcal{P} \lambda P \mathcal{P}(P)$
- 総記の「が」
 $P: \lambda \mathcal{P} \lambda P \forall x [P(x) \rightarrow \mathcal{P}(\lambda y [y = x])]$
 $A: \lambda \mathcal{P} \lambda P \mathcal{P}(P)$
- 中立叙述の「が」
 $P: \text{—}$
 $A: \lambda \mathcal{P} \lambda P \mathcal{P}(P)$

(2) a. 措定文 (predicational sentence)

奈緒美は学生だ。

- 「は」が主題
 $P: R(n, \text{学生}'(n))$
 $A: \text{学生}'(n)$
- 「は」が対比
 $P: \exists x [x \neq n \wedge \neg \text{学生}'(x)]$
 $A: \text{学生}'(n)$

b. 指定文 (specificational sentence)

奈緒美が学生だ。

- 「が」は総記
 $P: \forall x [\text{学生}'(x) \rightarrow x = n]$

¹以下で P は前提となっている部分、A は真理条件を示す。主題の「は」の意味論の中にあらわれる R は、文脈から定まる、個体と命題との間の何らかの関係である。

A: 学生'(n)

c. 倒置指定文

学生は奈緒美だ。

- 「は」は主題

P: $R(\iota x \text{ 学生}'(x), \text{学生}'(n))$

A: $\iota x \text{ 学生}'(x) = n$

本稿では、これらをより一般化して、述語の部分が単純名詞でなく、意味論的に2項述語に対応すると考えられる名詞を含む文を考える。具体的には次のような文である。

(3) a. 措定文

奈緒美は本学の学長だ。

b. 指定文

奈緒美が本学の学長だ。

c. 倒置指定文

本学の学長は奈緒美だ。

さらに、次のような形の、いわゆる「カキ料理構文」として議論されてきた(野田(1981), 西山(2003)など、およびそこに引用されている文献参照)文の意味論を扱う。²

(4) 本学は奈緒美が学長だ。

以下では、意味論的に2項述語に対応すると考えられる名詞の意味論を定式化し、それらを含む文の意味が、コピュラの意味論とのかね合いでどのように構成的に計算されるかを示す。また、従来「カキ料理構文」に関して唱えられきた規定に代わる意味論的規定を西垣内(2015a, 2015b)の分析を踏まえて与えるを試みる。

2. 2項述語として関係をあらわす名詞

2.1 2項述語としての「学生」

(2)で使われている「学生」は、「社会人」「主婦」などと対比して身分をあらわす用法であり、特定の大学の学生であることを必要としない。³

一方、「学生」も、特定の大学に通う人間を指す用法があり、この場合は、大学を指定しないと、その外延は定まらない。そこで、本稿では、より一般的に、意味論的な対応

² 「カキ料理構文」という呼び方は、三上(1960, p. 9)による「カキ料理ハ、広島が本場デス。」という例文をもとに、野田(1981)などで議論が始まったことによる。

³ 「学生」は文部科学省の用法では大学以上の教育機関に通う者を指し、高校・中学に通う者は「生徒」、小学校は「児童」、幼稚園・保育園は「園児」と言う。興味深いことに、「生徒」には、身分をあらわす用法はなく、特定の高校・中学を指定する必要がある。

- (i) a. 私は社会人でなく学生です。
- b. ?私は社会人でなく生徒です。
- c. 私は社会人でなく松蔭高校の生徒です。

物「学生'」も2項述語として、「学生'(x,y)」によって「xはyの学生である」と考えることにする。すなわち、「学生'」というのは、2つの項をとり、その間の関係をあらわす述語であると考ええる。

したがって、措定文「奈緒美は本学の学生だ」は次のような意味表示をもつことになる（以下では、便宜上、「本学」をsという個体定項であらわす）。

(5) 措定文

奈緒美は本学の学生だ。

- 「は」が主題
P: $R(n, \text{学生}'(n, s))$
A: $\text{学生}'(n, s)$
- 「は」が対比
P: $\exists x [x \neq n \wedge \neg \text{学生}'(x, s)]$
A: $\text{学生}'(n, s)$

同様に、指定文については、次のような意味表示でもってあらわすことができる。

(6) 指定文

奈緒美が本学の学生だ。

- 「が」は総記
P: $\forall x [\text{学生}'(x, s) \rightarrow x = n]$
A: $\text{学生}'(n, s)$

ここでは、前提(P)により、想定されている文脈では本学の学生がただ一人であるということが前提となる。

倒置指定文に関しても同様に、想定されている文脈では本学の学生が一人という前提を必要とするが、それは、文全体の前提(P)の中で、 $\iota x \text{学生}'(x, s)$ という ι 演算子が使われていることにより保証される。

(7) 倒置指定文

本学の学生は奈緒美だ。

- 「は」は主題
P: $R(\iota x \text{学生}'(x, s), \text{学生}'(n, s))$
A: $\iota x \text{学生}'(x, s) = n$

2.2 2項述語としての「学長」

「学生」と異なり、「学長」は、身分をあらわす用法もないわけではないが、一般には、大学を指定して、その大学の教学部門の責任者という外延を定めることが多い。したがって、前項の「学生」の扱いにならうと、(3)の各文は2項述語「学長'(x,y)」を用いて、次のような意味表示が与えられることになる。

(8) 指定文

奈緒美は本学の学長だ。

- 「は」が主題

P: $R(n, \text{学長}'(n, s))$

A: $\text{学長}'(n, s)$

- 「は」が対比

P: $\exists x [x \neq n \wedge \neg \text{学長}'(n, s)]$

A: $\text{学長}'(n, s)$

指定文と倒置指定文は、想定されている文脈では本学の学長が一人という前提を必要とするが、この前提は、「学長」の場合、自動的に成り立つと考えられる。

(9) 指定文

奈緒美が本学の学長だ。

- 「が」は総記

P: $\forall x [\text{学長}'(x, s) \rightarrow x = n]$

A: $\text{学長}'(n, s)$

(10) 倒置指定文

本学の学長は奈緒美だ。

- 「は」は主題

P: $R(\iota x \text{学長}'(x, s), \text{学長}'(n, s))$

A: $\iota x \text{学長}'(x, s) = n$

2.3 「カキ料理構文」と「学長」「学生」

(4)の「カキ料理構文」はどうであろうか? このタイプの文の特徴は、述部の名詞を選ぶということである。例えば、(4)で「学長」を「学生」に変えた次の(11)では容認度が落ちる。

(4) 本学は奈緒美が学長だ。

(11) ?本学は奈緒美が学生だ。

「学長」も「学生」も、大学を指定しないとその外延が定まらないという点においては、2項述語として意味論を考えることに違いはない。重要な違いは、「学長」の外延は大学を指定するとただ一人の個体なのに対して、「学生」の外延は、複数の個体を含み得る集合だという点である。

したがって、「本学の学生」という場合には、通常複数の学生からなる集合を考えるが、「本学の学長」という場合には、ただ一人の個体を想定する。(11)に関しては、「が」が

指定文と同様に総記の意味をもつために、本学の学生がただ一人だという前提が想定される。⁴

(4)において、「本学は」の「は」を主題、「奈緒美が」の「が」を総記ととると、次のような意味表示が考えられる。

(12) 本学は奈緒美が学長だ。

P: $R(s, \text{学長}'(n, s))$

P: $\forall x [\text{学長}'(x, s) \rightarrow x = n]$

A: $\text{学長}'(n, s)$

前提の1つ目は、主題の「は」によるもので、本学と奈緒美が学長であることとの間に何らかの関係があることを意味する。前提の2つ目は、総記の「が」によるもので、本学の学長が奈緒美以外にいないことを意味する。これらの前提の上で、奈緒美が本学の学長であると言っているのが真理条件である。

同じことを(11)についておこなうと次のようになる。

(13) ?本学は奈緒美が学生だ。

P: $R(s, \text{学生}'(n, s))$

P: $\forall x [\text{学生}'(x, s) \rightarrow x = n]$

A: $\text{学生}'(n, s)$

1つ目の前提は、本学と奈緒美が学生であることとの間に何らかの関係があることを意味する。こちらに関しては問題はないが、2つ目の、本学には学生が奈緒美以外にいないという前提は想定しにくい。そのために容認度が落ちると考えられる。⁵

3. 個体の同定による意味論

以上の分析により、(4)と(11)の容認度の差はいちおう捉えられているが、本節では、さらに一歩進んで、「学生」のような名詞と「学長」のような名詞に、より大きな意味的な性格の違いを与えた上での分析を提示したい。

3.1 「過不足なく指定する」項

西垣内(2015a, 2015b)は、「学長」のような2項述語に対応する名詞句(「中核名詞句」)をもつ文を基本的に次のような名詞句の構造から派生する提案をしている。

(14) [_{NP} 本学 (の)] [_{N'} 奈緒美 (という)] [_N 学長]]

⁴(2b)の「学生」のみでも、学生がただ一人だという前提をもつ。この場合、全世界で学生がただ一人という解釈は不自然なので、想定されている文脈では学生が一人という前提に解釈し直す。同様に、(11)でも、想定されている文脈では本学の学生が一人という前提が成り立てば、文自体は容認される。

⁵(11)に比べて、(2b)の指定文はさほど容認度が低いと思われる。これは、「本学の学生」でなく単に「学生」という場合には、その文脈で学生という身分をもっている者を「学生」と呼んでいるのだと考えられる。その文脈で、学生という身分をもつ者が一人しかいないという可能性があるからである。同様に、(11)においても、その文脈で本学の学生が一人しかいないという状況が考えられれば、容認度は上がるが、特定の文脈によらず「本学の学生」のことを問題にしているのであれば容認度は上がらない。

外項の「本学」が、主要部名詞「学長」の意味範囲を限定 (delimit) し、内項である「奈緒美」が「学長」という名詞の意味内容を「過不足なく指定する (exhaustively specify)」という関係をもつ。

ここから、「奈緒美」を文頭に置き、総記の「が」を伴わせ、コピュラを補うと指定文となる。⁶

(15) 指定文

奈緒美が本学の学長だ。

ここで、主語の部分と述語の部分を入れ替えると倒置指定文になる。

(16) 倒置指定文

本学の学長は奈緒美だ。

一方、主題の「は」を伴う「奈緒美」を文頭に置き、コピュラを補うと措定文となる。⁷

(17) 措定文

奈緒美は本学の学長だ。

最後に、指定文内の内項を文頭に置き、主題の「は」を伴わせると、「カキ料理構文」ができる。

(18) カキ料理構文

本学は奈緒美が学長だ。

「カキ料理構文」が指定文とこのような関係をもつことを想定すると、文全体の意味論は基本的に同じものになることが予想される。

3.2 倒置指定文の分析の拡張

(9) の指定文「奈緒美が本学の学長だ」において、真理条件は「学長'(n, s)」によって与えられている。これは、「学長'」を「学生'」と同様の2項述語としている分析である。

(2c) の倒置指定文「学生は奈緒美だ」においては、真理条件は「 $_{tx}$ 学生'(x) = n」によって与えられている。ここでは、タイプ $\langle e, t \rangle$ の1項述語から、 t 演算子によって項に対応するタイプ e の個体を得た上で、奈緒美をあらわす個体 n との同定をおこなっている。これが、西垣内 (2015a, 2015b) の言うところの「過不足なく指定する」ことの意味論的表現である。

郡司 (2015, (26)) では、(2c) の「学生」には、特定の学生を意味する一般化量子の意味論を与える考え方を採用している:

⁶本稿では、できた文に構成的意味論を与えることを目的としているので、統語的な派生に関しては、中立的な言い方をしておく。

⁷西垣内 (2015a, 2015b) では、「自分」の逆行束縛が不可能であることを根拠として、措定文を「中核名詞句」から派生されるとせず、ほぼこの形のままで派生されるとしている。いずれにせよ、以下では、他の構文とともに、派生の過程は問題にせず、それぞれの形のまま構成的意味論を与えている。

- (19) 特定の学生を意味する一般化量化子

$$\text{【学生】} \Leftrightarrow \lambda P [P(\iota x \text{ 学生}'(x))]$$

前節では、「学生」を意味論的に2項述語として分析しているが、(7)の倒置指定文においても、「本学の学生」に、2項述語の「学生'」から次の形の一般化量化子の意味論を与えることができる。

- (20) 特定の学生を意味する一般化量化子

$$\text{【本学の学生】} \Leftrightarrow \lambda P [P(\iota x \text{ 学生}'(x, s))]$$

(10)の倒置指定文における「本学の学長」についても同様の意味論を想定することができる。

- (21) 特定の学長を意味する一般化量化子

$$\text{【本学の学長】} \Leftrightarrow \lambda P [P(\iota x \text{ 学長}'(x, s))]$$

これをさらに一般化して、2項述語のままの「学長'」を用いている(9)の指定文にも同じ形の意味論を与えることを考える。

- (22) 指定文(改訂版)

奈緒美が本学の学長だ。

$$P: \forall x [\text{学長}'(x, s) \rightarrow x = n]$$

$$A: n = \iota x \text{ 学長}'(x, s)$$

真理条件(A)の部分は、次のようにして計算される。

- (23) a.
- $\text{【だ】} \Leftrightarrow \lambda P \lambda z \mathcal{P}(\lambda z [z = y])$

- b.
- $\text{【本学の学長だ】} \Leftrightarrow \text{【だ】}(\text{【本学の学長】})$

$$\Leftrightarrow \lambda P \lambda z \mathcal{P}(\lambda y [z = y])(\text{【本学の学長】})$$

$$\Leftrightarrow \lambda z \text{【本学の学長】}(\lambda y [z = y])$$

$$\Leftrightarrow \lambda z \lambda P [P(\iota x \text{ 学長}'(x, s))](\lambda y [z = y])$$

$$\Leftrightarrow \lambda z [\lambda y [z = y](\iota x \text{ 学長}'(x, s))]$$

$$\Leftrightarrow \lambda z [z = \iota x \text{ 学長}'(x, s)]$$

- c.
- $\text{【が】} \Leftrightarrow \lambda P \lambda P \mathcal{P}(P)$

- d.
- $\text{【奈緒美が】} \Leftrightarrow \text{【が】}(\text{【奈緒美】})$

$$\Leftrightarrow \lambda P \lambda P \mathcal{P}(P)(\text{【奈緒美】})$$

$$\Leftrightarrow \lambda P \text{【奈緒美】}(P)$$

$$\Leftrightarrow \lambda P \lambda Q [Q(n)](P)$$

$$\Leftrightarrow \lambda P P(n)$$

- e.
- $\text{【奈緒美が本学の学長だ】} \Leftrightarrow \text{【奈緒美が】}(\text{【本学の学長だ】})$

$$\Leftrightarrow \lambda P P(n)(\text{【本学の学長だ】})$$

$$\Leftrightarrow \text{【本学の学長だ】}(n)$$

$$\Leftrightarrow \lambda z [z = \iota x \text{ 学長}'(x, s)](n)$$

$$\Leftrightarrow n = \iota x \text{ 学長}'(x, s)$$

(21) に示す「本学の学長だ」の意味論は (8) の指定文にも適用できる。

(24) 指定文 (改訂版)

奈緒美は本学の学長だ。

- 「は」が主題

$$P: R(n, n = \iota x \text{ 学長}'(x, s))$$

$$A: n = \iota x \text{ 学長}'(x, s)$$

- 「は」が対比

$$P: \exists x [x \neq n \wedge n = \iota x \text{ 学長}'(x, s)]$$

$$A: n = \iota x \text{ 学長}'(x, s)$$

上の真理条件 (A) の部分の計算は、「は」が主題でも対比でも真理条件の部分の計算には $\lambda P \lambda P P(P)$ となるので、指定文の場合と全く同様の過程で得られる。

以上を整理すると、どのタイプの文でも「学長」の意味論は、2項述語としてよりも、 $\iota x \text{ 学長}'(x, s)$ という形の個体として登場することになるので、これを例えば g という個体定項として書いても同じことである。

(25) a. 特定の学長を意味する一般化量化子

$$\lambda P [P(g)]$$

b. 指定文

奈緒美は本学の学長だ。

- 「は」が主題

$$P: R(n, n = g)$$

$$A: n = g$$

- 「は」が対比

$$P: \exists x [x \neq n \wedge n = g]$$

$$A: n = g$$

c. 指定文

奈緒美が本学の学長だ。

- 「が」は総記

$$P: \forall x [\text{学長}'(x, s) \rightarrow x = n]$$

$$A: n = g$$

d. 倒置指定文

本学の学長は奈緒美だ。

- 「は」は主題

$$P: R(g, g = n)$$

$$A: g = n$$

指定文の前提 (P) の部分に 2 項述語の「学長」があらわれるが、真理条件はすべて、奈緒美と「本学の学長」という特定の個体との同定である。

4. 「カキ料理構文」の分析

最後に、以上で与えた「本学の学長」の意味論の発展形として、「カキ料理構文」を分析することを試みる。

「カキ料理構文」以外では常に「本学の学長」が構成素としてあらわれているので、対応する意味記述も ιx 学長'(x, s) のように、すでに「本学」の部分が s として学長' の第 2 項目にあらわれる形を考えればよく、この表現全体を g のような個体定項で置きかえることもできた。

一方、「カキ料理構文」では、「本学」が「学長」と離れた位置にあらわれるので、まず「学長」に対して、第 2 項を変数とした表示が必要となる。そこで、(21) の第 2 項を λ 変数とした、次のような表示を考える。

(26) パラメータ付きの学長を意味する一般化量子子

$$\text{【学長】} \Leftrightarrow \lambda P \lambda y [P(\iota x \text{学長}'(x, y))]$$

これに、今までのコピュラ「だ」の意味論を適用すると、「学長だ」の意味論は次の (27b) のようになる。ここで注意すべきは、【学長だ】は、タイプ $\langle e, \langle e, t \rangle \rangle$ の 2 項述語として与えられていることである。また、前述のように、ここでの等号は、 z を満たすものは、 w をパラメータとしてとる「学長」を「過不足なく指定する」ことの意味論的な表示である。

(27) a. 【だ】 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda z P(\lambda z [z = y])$

b. 【学長だ】 $\Leftrightarrow \text{【だ】}(\text{【学長】})$
 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda z P(\lambda y [z = y])(\text{【学長】})$
 $\Leftrightarrow \lambda z \text{【学長】}(\lambda y [z = y])$
 $\Leftrightarrow \lambda z \lambda P \lambda w [P(\iota x \text{学長}'(x, w))](\lambda y [z = y])$
 $\Leftrightarrow \lambda z \lambda w [\lambda y [z = y](\iota x \text{学長}'(x, w))]$
 $\Leftrightarrow \lambda z \lambda w [z = \iota x \text{学長}'(x, w)]$

(27b) に中立叙述の「が」を伴った「奈緒美が」を与えると、次の (28c) のような表示となる。ここでは、「奈緒美が学長だ」は文のタイプでなく、1 項述語のタイプ $\langle e, t \rangle$ をもつ。また、(28c) は、「奈緒美」の意味論である n が、 w をパラメータとしてとる「学長」を「過不足なく指定する」ことを示している。

(28) a. 【が】 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda P P(P)$

b. 【奈緒美が】 $\Leftrightarrow \text{【が】}(\text{【奈緒美】})$
 $\Leftrightarrow \lambda P \lambda P P(P)(\text{【奈緒美】})$
 $\Leftrightarrow \lambda P \text{【奈緒美】}(P)$

$$\Leftrightarrow \lambda P \lambda Q [Q(n)](P)$$

$$\Leftrightarrow \lambda P P(n)$$

$$c. \text{【奈緒美が学長だ】} \Leftrightarrow \text{【奈緒美が】}(\text{【学長だ】})$$

$$\Leftrightarrow \lambda P P(n)(\text{【学長だ】})$$

$$\Leftrightarrow \text{【学長だ】}(n)$$

$$\Leftrightarrow \lambda z \lambda w [z = \iota x \text{学長}'(x, w)](n)$$

$$\Leftrightarrow \lambda w [n = \iota x \text{学長}'(x, w)]$$

最後に、「本学」を個体定項 s に対応する一般化量子として与えて、学長' の第2項にそれが代入され、「奈緒美」の意味論である n が「本学 (s) の学長」である $\iota x \text{学長}'(x, s)$ を「過不足なく指定する」ことを示しており、期待される意味表示となっている。

$$(29) a. \text{【本学】} \Leftrightarrow \lambda P P(s)$$

$$b. \text{【本学は奈緒美が学長だ】} \Leftrightarrow \text{【本学】}(\text{【奈緒美が学長だ】})$$

$$\Leftrightarrow \lambda P P(s)(\text{【奈緒美が学長だ】})$$

$$\Leftrightarrow \text{【奈緒美が学長だ】}(s)$$

$$\Leftrightarrow \lambda w [n = \iota x \text{学長}'(x, w)](s)$$

$$\Leftrightarrow n = \iota x \text{学長}'(x, s)$$

最後の行を (25) で用いた個体定項 g を用いて $n = g$ と書くことは可能だが、途中のステップはパラメータを伴っているので、大学をあらわすタイプ e の個体からその大学の学長であるタイプ e の個体を与える、タイプ $\langle e, e \rangle$ の関数 γ を用いてあらわしてみる。

$$(30) \text{ パラメータ付きの学長を意味する一般化量子}$$

$$\text{【学長】} \Leftrightarrow \lambda P \lambda y [P(\gamma(y))]$$

「本学は奈緒美が学長だ」の構成素ごとの意味論は以下ようになる。

$$(31) a. \text{【学長だ】} \Leftrightarrow \lambda z \lambda w [z = \gamma(w)]$$

$$b. \text{【奈緒美が学長だ】} \Leftrightarrow \lambda w [n = \gamma(w)]$$

$$c. \text{【本学は奈緒美が学長だ】} \Leftrightarrow n = \gamma(s)$$

5. おわりに

以上、郡司 (2015) の提案をより一般化し、2項述語に対応する名詞を含むコピュラ文の意味論に拡張した。特に、2項述語のときには存在しなかった「カキ料理構文」にまで分析を拡張する過程で、パラメータ付きの一般化量子という概念を用いて、適切な意味論を与えることができた。

「カキ料理構文」である「カキ料理は広島が本場だ」については、野田 (1981) による、「本場」が「カキ料理」にとって「重要な側面」をあらわすことが条件であるという指摘や、西山 (2003) などによる、「本場」が「非飽和名詞」であることが条件であるという指摘などがあり、それぞれに批判もある。

本稿では、西垣内 (2015a, 2015b) による、「広島」が「本場」の意味内容を「過不足なく指定」という規定に基づき、その形式意味論的な定式化を試みた。特に、「過不足なく指定」ができるためには、「本場」の位置にくる名詞（本稿では「学長」）が、パラメータ付きの一般化量子子として分析され、さらにその外延がタイプ *e* の単一個体であることが重要な条件となる。

西垣内 (2015a, 2015b) には他にも、この種の構文に関する様々な重要な指摘があり、本稿の扱いで意味論的に記述ができるものも多くあると考えられるが、本稿では紙数と時間の制限から触れることができなかった。またの機会としたい。

参考文献

- 郡司隆男 (2015). 日本語のコピュラ文の形式意味論的分析. *TALKS (Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin)*, **18**, 13–24.
- 三上章 (1960). 『象は鼻が長い』. くろしお出版, 東京.
- 西垣内泰介 (2015a). 「非飽和名詞」を含む構文の構造と派生. 「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会ハンドアウト, 2015 年 3 月 15 日. Available at <http://j-int.info/presentation/>
- 西垣内泰介 (2015b). 「指定文」および関連する構文の構造と派生. 「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究発表会ハンドアウト, 2015 年 6 月 6 日. Available at <http://j-int.info/presentation/>
- 西山佑司 (2003). 『日本語の名詞の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』. ひつじ書房, 東京.
- 野田尚史 (1981). 「カキ料理は広島が本場だ」構文について. 『待兼山論叢 日本語学編』, **16**, 45–66.

Author's web site: <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>

(受付日: 2015 年 12 月 10 日)